

新潮社

銀杏散りやまず

辻邦生

邦生
杏散りやまず

新潮社



著者略歴

1925年東京生れ。東大仏文科卒。学習院大学文学部教授。『廻廊にて』で近代文学賞受賞。その後、『夏の砦』を経て、『安土往還記』（芸術選奨新人賞受賞）『嵯峨野明月記』『背教者ユリアヌス』（毎日芸術賞）で、独得な歴史小説を生みだした。近著に『フーシェ革命暦』がある。



銀杏散りやまず
いちようち

一九八九年九月二〇日 発行
一九九〇年一月二五日 四刷

著者 辻 邦 生

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一番地
郵便番号一六二 振替東京四一八〇八
（編集部）〇三一―二六六―五四一一
（業務部）〇三一―二六六―五一一一
電話

印刷 錦明印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

~~~~~ © Kunio Tsuji 1989. Printed in Japan ~~~~~

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-314211-1 C0093

## 目次

|     |            |     |
|-----|------------|-----|
| 第一章 | 銀杏散りやまず    | 7   |
| 第二章 | ある家系       | 35  |
| 第三章 | 笛吹川のほとり    | 57  |
| 第四章 | 風林火山の旗を追って | 80  |
| 第五章 | 辻保順病院由来    | 105 |
| 第六章 | 桃源の神の舞い    | 128 |
| 第七章 | 甲州儒医列伝     | 150 |
| 第八章 | ある古文書との出会い | 175 |
| 第九章 | 「春 秋」      | 198 |

|      |           |     |
|------|-----------|-----|
| 第十章  | 烟霞山村図     | 218 |
| 第十一章 | 十字亭夜話     | 237 |
| 第十二章 | 「東都日記」の裏面 | 265 |
| 第十三章 | 東山道先鋒隊前後  | 279 |
| 第十四章 | 護国隊始末その後  | 299 |
| 第十五章 | 大洪水まで     | 318 |
| 第十六章 | 離郷        | 336 |
| 第十七章 | 回想のなかの肖像  | 353 |
| 第十八章 | 告別のとき     | 372 |

装画  
磯見輝夫

銀杏散りやまず



## 第一章 銀杏散りやまず

昭和五十五年。十一月にはめずらしく寒い日がつづいた。シベリアから寒気団が流れてきて、日本列島をすっぽり包んでいるというテレビの解説を聞きながら、私は前の年パリ大学でフランス人の学生に日本の風土の説明から講義を始めたことを思い出していた。

夏には灼熱の日々がつづき、耐えがたい湿気が列島を覆うが、逆に冬には、太平洋側はからりと乾いた晴天が多く、日本海側は深い雪がしんと降りつづける。「君たちはカワバタの『雪国』を読んだことがあるだろう。あのロマンの背景をなす地方は、この、冬の典型的な降雪地帯で、時に二メートルを越える雪が積もることがある」

私はこんな説明をフランス語でやりながら、日本の墨絵で好んで描く竹に雪の図柄が、モンsoon圏に位置する日本列島の気候の多様性を象徴している、すなわち竹は熱帯産の植物であり、そこへ寒帯の気候現象である雪が降り積もる——日本では熱帯と寒帯が共存しているのだ、という和辻哲郎の説を紹介したりしたのであった。

フランスから戻ってきて、あまりパリでの生活を思い出す暇がなかった。一年あまり留守をしたむくいで、雑用は片付けても片付けても残っていた。

ちょうど十一月は新年号の雑誌原稿にかかる月だったので、そんな仕事に追われ、ようやく最

後の原稿が終ったのが火曜日だった。

「終ったの？」

夕方、居間に出て、郵便物を見ていると、妻が部屋から顔を出して言った。

「ああ、終った」

しばらく中断していた連載小説が再開したので、それを中心として幾つかの大浪を越えるような感じだった。一つ越え、二つ越えして、ようやく三つ目を終って、今月も無事越えられたという感じであった。

「すこし時間ができたら、国分寺にいつてみたら？」

国分寺には父母が住んでいた。フランスに一年数ヵ月滞在しているあいだ、時どきパリから国際電話をかけたものの、父母の声には、自分たちの寂しさを息子に感じさせまいとする思いやりがいつもこもっていた。

「うん、こちらは二人とも元気でいるからね、安心して下さい」

電話は、国内電話よりワン・テンポ遅れて返事がかえってくることを除くと、声ははっきり聞えるので、東京で電話しているのと変りなかった。それにパリの電話はダイヤルを廻せば、すぐ東京の電話のベルが聞える。それだけに、昔のような距離感はなく、両親とも近くに住んでいる気がしていた。ただ電話の奥で聞える声に、こちらに心配をかけまいとする配慮が感じられただけに、受話器を置いたあと、一種のほっとした思いの底に、申訳なさのようなものが澱<sup>も</sup>んでいた。自分の仕事に熱中して、それ以外のものはすべて切り棄ててきた半生の生き方が、そんな瞬間、かすかな後<sup>うしろ</sup>めたさをもって、ちらと頭の隅を横切る。

こんどのフランス滞在でも、人に頼まれたのでも何でもなし。こちらからわざわざパリ大学の

教職の口を捜してもらつて、無給でも何でもいいから働きたいと申入れたのだった。私はかねがねフランスだろうとどこだろうと、一個の当り前の人間として普通に働けるようでないと思つていた。たとえば東京の学生を教えるのと同じようにパリの学生を教えられなくてはならぬ。西洋も日本も同じ人間同士の生活だといつても、たんなる題目だけのようないふがした。少くとも私たちのように西洋は先進国で、日本は特殊な国だといふうに感じさせられながら生きてきた世代の人間には、多少この種の荒療治を施して、人間同士という自明の感覚を取り戻さなければならぬ——私はそう思つた。晩年パリの孤独な生活のなかで、なお西洋という重荷に苦しんでいた師の森有正のことを考えると、なおさら私はそれを自分の経験のなかの事実として、はつきり擱んでおきたかつた。頭のなかでそうなのではなく、現実に、事実としてそうであること、そのように自然に振舞えること、それが肝要だった。そのためにはどうしても実際にパリ大学で働くことが必要だった。

大学にポストが見つかつたことも、無給講師から客員教授に昇格させてもらったことも、すべて間に立つた人の好意があつたからだし、それより何より運がよかつたからであつた。十五人ほどの学生たちも、これがフランス人かと思うほど人なつっこかつた。学生たちはみんなでクラス・コンパを開いてくれたりしたが、これなども異例のことだと同僚の講師が言つていた。学生のなかにはちゃっかりした子もいたし、おっとりとした遠慮深い子もいた。男子学生も女子学生も日本のやさしい世代と呼ばれる若者たちと同じようにやさしかつた。私はパリ大学に教えにきてよかつたと彼らを見るたびに思つた。何人かの学生の父母とも会う機会があつた。私は教師としてその両親から「よろしく」と言つて子弟のことを依頼された。私は責任をもつて働くことの重さと張り合いを感じた。そしてまさにこうした経験の時間を生きることが、こんどのフランス

滞在の意味だったのだと思った。

それだけに両親に電話することも間遠になることがあった。電話をしようと思っても、東京が深夜だったりして、見合わせたり、見合わせているうちに、また二、三日電話を忘れたりした。

東京に戻ってから事情はさして変らなかった。仕事が一段落すると、国分寺まで行って両親の顔を見られるのが故国にいる有難さだったが、それも仕事がつづくと、すぐ二週三週はたってしまう。定期的に会うようにしていればいいが、かえって両親の負担になると困るので、それもうとうう決めかねていた。

長い外国滞在のあと、いかに仕事が忙しくても十月に一度訪ねただけでは両親に相すまいといって、妻が、仕事の一段落した機会に、国分寺に行つてはとすすめたのは、こうした状態がさらにずつとつづきそうだったからであつた。

「そうね、明日、明後日は大学の講義があるから、金曜日にでもいってみよう」

寒い夜、私たちは季節にふさわしく湯気のたつ鍋をつつき、仕事が終わったときだけに飲むビールのコップを傾けた。

「さだまさしの『生生流転』の歌詞はなかなかいいね。フランスにいつていたあいだに幾つかレコードが出ていたみたいだ」

私は、送られてきた郵便物の束のなかに、へまさしんぐ・ういれっじ」というさだまさしの愛好者グループが出している小雑誌を見つけ、そこに転載されていた『生生流転』の詩を読んだところだった。以前、さだまさしについて書いたことがあって、それが氏の詩集に解説として再録され、パリまで新しいレコードを送ってもらった。しかしそれには『生生流転』も『防人の歌』も含まれていなかった。

「鳥は空で生まれて 魚は海に生まれたのなら

時間と呼ばれる 長い長い河の中で

きつとわたしは生まれた

生きるという奇蹟を 思い切り信じて過ごしたい

喜びと悲しみと憎しみと愛と死を

つまずき乍らでいいから じっくりしむ人になりたい

ああ あたりまえに生きたい ささやかでいいから

ああ とても優しくなりたい 素直に生きてゆきたい」

私はいつもこの詩人兼作曲家に限りないやさしさとひたすらな生への真摯さを感じて、それが何よりも先に身に沁みてくる。さだまさしの詩を読んでいると、すべてを棄てて文学に打ち込んできた自分が、ひどく傲慢だったような氣持になってくる。もっと周囲の人に素直に、やさしくなるべきではなかったか、という悔恨をともなった反省が生れてくる。

このときも鍋の湯気に包まれながら、季節はずれの寒氣団の覆う日本列島の秋をふと感じ、私は、久々にさだまさしの歌を聴いてみたいと思った。

食後、父母に電話した。いつものように元気な父の声が電話線を伝わってきた。

「ずっとお元気でしたか。仕事つづきでご無沙汰して申し訳ありません」

「いや、仕事は結構。しかし身体をこわさんようにしなくてはいけない」

「はい、身体のはうは元気です」

「こちらも二人とも元気だ。それに余計に送って貰って、おかげさまですっかり懐が暖かだ。有

難う」

父は二十年ほど前に詐欺にあつて、都心にある社屋を失つていた。長い裁判があり、その結果は思わしくなく、結局社屋を手放して近所の小さな事務所を借りた。この事件には私も何かしなければならなかったのかもしれないが、意識的にそこから遠ざかうとしていた。逃げていた、といわれても仕方がないような形で、一切を父にまかせて、私はただ文学に打ち込んでいた。多少そういう態度に負い目を感じ、それをジャスティファイするような気持もあつたのであるう、私は文学に関するかぎり自らの生活に禁欲的であつた。こんな我儘を通す以上、それにふさわしい厳しさを持たなければならぬ——そんな気持もどこかに働いていた。私は決して酒が嫌いではないにもかかわらず、編集者や友人とたまに飲むだけだったのも、こうした気持の延長であつた。李白の詩や大伴旅人の歌を口ずさみながら、酒盃を手にしなのは、一個の文学的矛盾であつたが、飲むという直接の行為より、こうした間接的に想像力でそれと結びついているほうが、よりなまなましくその実体を感じることもありうる——私は、時にそれが詭弁の趣を含みながらも、真実であることを知っていた。だが、父に対するジャスティファイする気持を、逆に、自分で文学のために利用してゐるのではないか——時どきそんな反省が頭を持ち上げることがあつた。つまり私は二重に父の存在に負ふさつてゐるのではないか、と思われたのである。

私が父にいくばくかの金を送ることにしたのは、この詐欺にあつて一切の財産を失つた父に対する謝罪の気持もあつた。一度裁判所に呼ばれて証言のようなことを言わされたが、前後の事情をよく呑みこんでいなかった私は、おそらく父の不利になることを言つたのではないか、という気持が、心の奥によどんでいた。そのことについて弁護士が何か言つたわけではなかったし、裁判の途中で指摘されたわけでもなかったが、私が言つたある言葉に、一瞬、相手の弁護士の顔が

はつきり動いたのを見たのであった。何か顔の上に暗く漂っていたものが、ぱっと消しとんだ、とてもいいのか、とにかく相手方が喜色を浮べたのは事実であった。

私は何か致命的な失言をしたのではないか、という痛みがそれ以来心に住みついていた。杜屋が父の手を放れるとき、すでに老いていた父は、顔をうつむけて、声を殺して泣いた。それは、一度も弱いところを見せたことのない父が、はじめて見せた悲しみであった。私は不意をつかれた思いで、父を冷たく見ていた。一方では、父がどんなに口惜しい思いをしているか、痛いように分りながら、父を遠くから見るように見ていた。しかしそこにはもう一つの気持が動いていた。それは知らぬ間に父を裏切った結果こうなったのではないかという自責の気持だった。父の悲しみを見た驚きと自責の念とは、そのあと、私の胸に深く住みついた。

私が多少経済的な余裕ができるとすぐ父に資金援助を申し出たのは、この災難の償いをしようとする気持があつたからであり、父から有難うと言われるたび、心が痛んだ。「これはもともと、お父さま、あなたのお金ではありませんか」私は心の中でそう言った。そしてそう言うかわりに、「このお金を稼いだした頭は、お父さまが学資を出して作って下さったのだから、貯金のかわりに、ぼくの頭に投資していたのと同じですよ。これはお父さま自身のお金と同じです」などと冗談めかして言った。父はそれを単純に息子の好意と解して喜んでいた。

「有難う、有難う」という父の言葉は胸に響いた。そしてこの響きのなかには、文学のために人でなしの暮しをしている今の自分への反省が、いくらか入っていた。

何とか人なみに親子団欒の時を持ってもいいのではないか、と思ったり、そうしたぬくぬくした仔犬の集りのような温みは、文学への裏切りだと思ったり、私の心は中年になるまで定まらなかった。

中学の頃、ある日曜、父が自転車の遠乗りを提案したことがある。母だけは留守番で、父と弟妹と私と四台の自転車に分乗して、多摩川までゆくのである。当時、私たちは赤坂に住んでいたので、青山渋谷を越えて多摩川までゆくのは、半日の恰好の遠乗りコースだった。もちろん働き盛りの父がしばしばそう言いだしたわけではない。日曜は父が生涯打ちこんだ薩摩琵琶さつまびわの会がよく開かれた。日曜でも早朝からいらないようなことはめずらしくなかったが、その日曜日は父も上機嫌で、弟妹たちも郊外の遠足を喜んでた。

しかし私にはそれが面白くなかった。直接のきっかけが何だったか、もう思い出すよしもないが、私は一人だけ拗ねて、部屋にこもって本を読んでた。本を読むことは子供の私の唯一の情熱でもあり、快樂でもあった。ひよっとしたら、何か夢中になつて読んでいる本があつて、それから離れたくなかつたのに、べもなく遠乗りを断つたのかもしれない。私の悪い癖で、そういうとき、読書のほうが遥かに価値があつて、自転車の遠乗りなど俗人のなす業だという優越感を心に感じていたのであつたらう。まして家族団欒的ムードはたまらないという少年期の潔癖な反抗的気分も加わつて、おそらく父のやさしいすめを腹立たしい思いで断つたのだと思う。

みんながいつてしまうと、私は、なぜ父の好意を裏切るようなことをしたのか、悔まれた。父には非難すべきところは一つもない。弟妹があればほど喜んでいるなら、どうして遠乗りにこころよく加わつてやらなかつたのか。読書もいいが、それはいつだってできる。父との遠乗りは日曜しかできないではないか。

時間がたち、家の中の静寂が濃くなるにつれて、私は自分の傲慢な態度が悔まれた。本など読むのを偉そうに思つた自分が、かえつてみじめな人間に見えてきた。

ついに私はその悔恨に耐えられず、父のやさしさに詫びを言おうと思つて、自転車に乗つた。